

一章 終わらぬ兎達の餅つき

兎のような耳を持つ少女が二人、餅つきをしていた。

竹林で鈴仙・優曇華院・イナバが杵を持ち、体重をかける。因幡てゐが手水をして巨大な白の餅をこねる作業をする。それは只の餅ではなかった。

ぐによぐによとうごめくその餅は斉藤勇気の顔が生えていたからだ。

生暖かい餅が身体中にネバネバと纏わり付く。もがいてももがいても糸を引き続け、全くビクともしない。媚薬のせいか、餅のネバネバが不思議に快感に変わっていく。

斉藤勇気の身体は顔以外は全て固められ、白い餅へと変わっていた。

「……このままじゃ……美味しいお餅になっちゃうよ……」

「そうそう貴方は幸せな美味しいお餅になるのよ♪」

そう言って、てゐは手水をしてマッサージするかのようには餅と化した身体を捏ねていく。

「……そんな……捏ねられただけでこんなに気持ち良いなんて……ボクがボクじゃなくなっちゃうよ……」

…！？

「さあ！ 吐きなさい！ レイセンの居場所を！ じゃなければ、その餅にたくさんのお餅を吐き出す事になるわ」

優曇華が杵を押し付け、勇気の股間に体重をかける。

「しらなっ……うにゅっ！？」

ぎゅっぎゅっつと絶妙の部分に力を込められ、快感を伴っていく。

「知らない？ 貴方がレイセンを攫ったのを見てるのよ！」

トドメとばかりに杵をぐりぐりと押し付けられ、餅の粘りと体重によって快感が絶頂に達し、勇気の身体が糸を引きながら跳ねる。

熱い物が噴出すのを感じた。餅の中でドロドロしていくモノが股間の中で這い回る感覚がする。

「……ボクは……攫ってなんかいないよ……絶対に……」

勇気の息切れしながらの発言に優曇華の赤い瞳が怒りの色に染まっていく。

「てゐ！」

「あいよ！」

てゐが手水をし、勇気の股間の部分を両手でぐにぐにと捏ね上げる。

餅のネバネバとてゐの捏ね回しが徐々に快感を伴っていく。

「……止めて……気持ち良すぎてまた……」

「あら、二日目の拷問で、まだ動き回れるなんて活きの良い餅ね。このまま固まれば美味しい餅になるね」

股間をまるでお団子を丸めるように手を動かし、その動作が速くなっていく。

餅の中でピチャピチャとぬめる液体の音がいらしく竹林に響く。

「中でネバネバでドロドロで……餅の中で餡子がいっぱいになっちゃうよおおっ!？」

「てゐのお手々で幸せなお餅にしてあげるね」

「あうううっ!?!」

てゐがトドメとばかりに餅を強く握った瞬間、快感が絶頂に達し、勇気の身体が跳ねて餅が糸を引く。

「まだ餡子は対して取れてないじゃないの……どうてゐ？」

「まだまだいけそうね」

てゐが勇気の身体の餅を捏ね回すと、前よりもピチャピチャと粘液の音が響くようになっていた。

「……やめて……」

「じゃあ、一気にいくわね」

そしてまた杵で股間を押し潰す動作をする優曇華。

「ううううっ!?!」

それに耐えられるはずもなく、勇気の身体が大きく跳ねて餅の糸を引く。

「もう一発〜♪」

てゐの手水と激しい餅を捏ねる動作で、ビクンと跳ねる、

ピチャピチャと餅の中の粘液がしだいに増えていくせいとか、粘着質な音が大きく聞こえるような気がする。媚薬のせいとか、快感が止まる事は無かった。

しばらくして勇気の身体が過労のせいか、動かなくなる。

「てゐ。そろそろのし餅にしちゃう？」

「そうね。幸せは十分に堪能できたし、これで兎達に食べられても本望よね？」

「そう言って笑顔で顔を覗き込むてゐ。」

「……このままじゃ……食べられちゃう……」

——どうしてこうなったのだろう？

——そうだ……あの兎さえ追いかければこんな事にならなかったのかもしれない。

博麗神社の境内で起きた。

朝、起きて障子を開けると空にキラリと光るモノが見えた。

それは人、少女のように思えた。あえて人と違う部分を言えば頭には兎のような耳が生えているぐらいだろうか？

羽衣を纏い、ふらりと綿毛のように降り立つ少女。

兎のような耳はあるが、その着ている物は学生服のように思えた。

「ここは前の神社！？」

その制服からもしかしてこの子も幻想郷の外から来た人間ではないかと思った。

「……あの……」

歩む寄り、勇気が声をかけた瞬間だった。

少女は逃げるように駆けていた。

「待って!？」

森の中へ駆ける少女。

裸足なのに必死で少女を追いかけていた。

「しつこい!」

「待って! 話を聞いて!」

「地上の人間が何の話を聞けって言うの?」

踵を返す少女。

息を切らせながら勇気は質問を問う。

「その制服もしかして学校の……幻想郷の外から来た人なの……?」

「……学校? 幻想郷の外? 私はレイセン。月の玉兎……じゃなくて、妖怪でもない……この地上の人間なの?」

「そ、そうなんだ……そうだよね。そんな耳してるし、でも人間なの?」

「どっからどう見ても人間でしょ?」

それにしては動揺の色が見えるのは気のせいだろうか。

「ボクは斉藤勇気。君は?」

「私はレイセン」

手を出すと、笑顔で握り返してくれた。

意外に良い人なのかもしれない。

【とんだ人間がいたものね】

何処からか聞き覚えのある女性の声が聞こえた。

「誰！？」

慌てて周囲を見回すレイセン。

森の中には勇氣やレイセン以外の気配は何も無いように思えた。

ブーン！？

虫の羽音に似た森の中で響いた。

気づけばレイセンは消えていた。

「レイセン？ 何処に行ったの？」

「見つけた！ 貴方がレイセンを攫った犯人ね！」

振り向くと、ロングの髪に兎の耳を付けた少女がそこに居た。レイセンと同じような黒い学生服の衣装、ピ

ンと張った兎の耳は違うものの、似たような何かを感じる。

「攫ったって、さつき出会ったばかりなのに！？」

少女が睨むような目つきは不思議に真っ赤に見えた。

その瞳を見ていると、何だか頭がクラクラしてくる。

「問答無用！」

何処からか赤い瞳の少女とは別の声が聞こえたと思うと、固い物で頭を叩かれたような衝撃が走った。よろめき倒れる瞬間、兎耳の付いた癖っ毛の少女がニヤニヤと笑う姿がぼやけて見えた。

生暖かくネバネバと纏わり付く気持ち悪い感触に目が覚める。

手足を動かすと、白い物が糸を引いて強い抵抗で元の位置に戻される身体。

「なにこれは！？」

炊き立てのご飯に似たような匂い……そして自分は巨大な白に寝かされているようだった。

「それは貴方が美味しい幸せな餅になるようにするための下ごしらえよ」

癖っ毛の兎耳の少女の顔が覗き込む。

「さあ！ 吐いてもらおうわよ！ レイセンの居場所を！」

「レイセン？ さっきの女の子の名前？」

「やっぱり貴方がレイセンを攫った犯人なのね！ 貴方は何？ 月のスパイ？」

兎耳の学生制服を着た少女が睨むように勇気を見る。

「月のスパイ！？ 何の事かボクは全然、分からないよ！ ボクは君達の名前すら分からないし……」

「この子は見覚えはない？ 鈴仙・優曇華院・イナバ。元の月の民の脱走兵……そして私は因幡てゐ」

「ちよつと何でバラすのよ……まあ、偽名だけど」

「同じ名前ばかり……レイセンが二人に因幡も二人？」

「そう貴方の名前は既にバレているのよ！ 月のスパイ！ 斉藤勇氣！」
指をさされる勇氣は思わず身体をビクリとさせる。

「どうしてボクの名前を！？」

「やっぱりそうだったのね！」

「って、違うよ！？ 名前は合ってるけど、月のスパイとかいうのじゃないよ！？」

「あくまでもシラを切るなら良いわ。吐かさせてあげる！」

杵を持った優曇華が餅に包まれた勇氣に向ける。

それが振り下ろされ、勇氣は血染めの餅になるかと想像した。

だが、優曇華は杵を振り下ろさずに徐々に体重をかけていく。

「ちよつと……どこに！？」

優曇華が体重をかけた場所はちょうど股間に当たる箇所だった。

「貴方の白い餡子を少しずつ搾り取って餅にするの。すぐに吐けば餅に餡子を吐き出さずに済むでしょ」

「白い餡子？ 何を！？」

優曇華が杵をすり潰すような動作をすると、身体中に快感が走る。

「てゐの意味は分かった？ レイセンの居場所を吐かなければ空っぽになるまで白い餡子を吐き出す事になるのよ」

「そ、そんな！？」

「餅は媚薬入りだからよく餅に馴染んで幸せな気持ちになれるでしょ？」

笑って言うてゐる。

心なしか、ネバネバの感触が快感を伴っていく。

「やめて……美味しい餅になんかに……なりたく……ないよ」

「これでもそんな事を言つてられるかしら？」

優曇華が円を描くような餅を混ぜる動作で、快感が絶頂に達した。

「あううううっ！？」

我慢したものの、耐えられずに餅に餡子を吐き出してしまふ。

「その顔、餅と一緒に混ぜ混ぜされてイっちゃったのね」

てゐが笑顔で股間の箇所を触る。

「餅なんかでイってんなんかないよ……」

恥ずかしそうに目を逸らすと、股間の箇所を握るてゐ。

くちゅっ！？ くちゅっ！？ くちゅっ！？

餅の中で怪しい粘る音が聞こえた。

「美味しそうな餡子の音がいっぱいね。たくさん出したのね。餅なんかで♪」

「ひぐうっ！？」

「じゃあ、一個目のお団子を作つてあげて」

「一つ目ね〜♪」

てゐは手水をし、股間の箇所の餅を掴み、平たく伸ばしていく。

「それなんか気持ちいいいっ！？」

「良いよ。たくさんさんの餡子を出して行ってね♪」

「勇気の身体が跳ねると同時に股間の餅を引き伸ばし、手で絞るように千切り、手早くお団子を作る。」

「そ、そんな！？」

「お団子一つ目、完成♪」

「団子は大きな杯の上に乗せられる。」

「まだ吐く気にならない？」

「そう言つて優曇華は隣にあつた釜に入った新たな餅を勇気の股間に乗せる。」

「にゅっ！？ 攫つてなんかいないよ！」

「媚薬で病みつきになつたの？ まあ、良いわ。続けるから」

「そして再び、杵で押し潰し、円を描くような動作が行われて餡子を吐き出してしまふ。」

「んにゅううっ！？」

「てゐ。二個目」

「またまた幸せのお団子♪」

「手水をして股間の餅を平たく伸ばす。それだけで身体中に快感が走り、餡子を吐き出してしまふ。」

「股間の餅が引き伸ばして千切られ、二個目のお団子が作られる。」

「それもまた杯の上に乗せられる。」

「さていくつできるのかしらね？」

「もう……やめて……」

勇気の声も虚しく何度も餡子を吐き出され、杯の上に十個近くのお団子が作られた。

「これ以上は無理そうね」

「吐きそうに無いし、残念だけど最後の仕上げ」

優曇華とてゐは餅に包まれた勇気を持ち上げ、打ち粉がされた台の上に置かれる。

「何を……?」

てゐがまんべんなく粉を振りかけると、優曇華が長い棒を何処から取り出す。

「貴方を一度固めて二日目の拷問にかける事にするわ」

「ボクは……何も知らない……!」

「あ……そう!」

優曇華は餅に包まれた勇気を長い棒で引き伸ばしていく。

「うにゆうううっ!」

長いめん棒で引き伸ばす動作は股間に集中し、快感を伴い、勇気の身体がビクンと跳ねて餅が白い糸を引く。

「駄目じゃない。動くとのし餅にならないじゃない」

てゐが股間を触ると、粘液がぬめる妖しい音が響く。

「ウフフツッ!」 まだ、餡子が残っていたのね。このまま吐かなかったから本当に美味しいお餅になりそう

ね

「……攫ってないよ……」

「まだ言うの！」

優曇華が再び、股間にめん棒を強く押し当てる。

「うにゅっ!？」

今度のはてゐが両手にめん棒を押し当てた為に勇気の身体は微動だにしか動かなかった。

「このまま押さえていれば、そのうち疲れるか、餅が固くなるかで動けなくなるでしょ？」

「そうね……明日の拷問が楽しみね。餅は一晩で硬くなった後、蒸して柔らかくして何度でも繰り返し返せるの」

「本当に知らないのに……」

「永遠に吐かないなら兎達の美味しいご飯になるだけよ」

「……後はここだけね」

霊夢が降り立ったのは迷いの竹林だった。

勇気が行方不明になってからは三日経過し、未だに見つける事はできなかった。

「妖怪に食べられてなければ良いけど」

霊夢は溜息をつき、歩き始める。

プツン!?

何か糸の切れる音が聞こえ、向かって来る物を咄嗟に避け、札を投げる。

「あ、あら霊夢じゃない!? こんな所で何をやっているの?」

てゐの顔の横の竹に札が突き刺さり、小動物のようにビクリと身体を震わす。

そして霊夢の背後の竹には糯竿がビチャリと音を立ててくつつく。

「それはこっちの台詞よ! これはあんたの罨?」

「うーん。確かに私の罨だけど、それは妖怪撃退用の罨ね」

「妖怪撃退用? 永遠亭からずいぶん離れた場所に罨を張るのね。あんたらしいと言えばあんたらしいけど」

心なしか、てゐの挙動が少しおかしいような感じがする。

「もしかして永遠亭に行くつもりなの?」

「そうよ……あんた勇氣が何処に行ったのか知らない?」

「ああ……斉藤勇氣の事ね。あんたも宴会に来る?」

「宴会って、何よ?」

「あら、勇氣から聞いてなかったの?」

てゐが口を押さえ、悪戯な笑みを向ける。

「聞いてないわよそんなの……だいたい勇氣が何も言わずに行く訳ないでしょ!」

「怪我をした哀れな兎を助けたご褒美に永遠亭の宴会に招かれているのよ」

「何処をほつつき歩いていると思えば永遠亭に居たのね……神社の仕事で大変だって言うのに!」

永遠亭に向かおうとする霊夢にてゐが立ちほだかる。

「今は行かない方が良いかもね。最近の兎達は色気づいてるから勇氣は引っ張りダコ状態なのよね」
靈夢は勇氣が妖怪兎達に囲まれている姿を想像したのか思わず腕をプルプルと震わせる。

「……あの馬鹿！ こっちが心配してるって言うのに！？」
踵を返す靈夢。

「あら、勇氣を迎えに行かないの？」

「知らないわよあんな奴！」

「ウフフフツ！？ 可哀想にね……そのうち博麗神社に美味しいお餅を届けてあげる」

「どうせくれるなら正月にまでには届けてよね」

そう言っ飛んで行ってしまふ。

「靈夢！」

声を上げて翼をはたかめせて飛んで来たのは夜雀、ミステイア・ローレライの姿だった。

「何よ？ あんたも勇氣を探していたの？」

かつては人間を攫って捕食するような妖怪だったはずなのに今は不思議に人間の勇氣に好意を抱いている。

「三日も経てば誰でも心配するわよ！ 靈夢、勇氣の手がかりは見つかったの？」

「心配する事ないわよ！ 今は永遠亭に遊び浸っているみたいだし！」

「え？ 勇気が貴方に黙って永遠亭に行ったって言うの？ そんな事ある訳ないじゃない！」

「実際にあつたんだから仕方ないじゃないの！」

その言葉に胸倉を掴むミステリア。

「勇気が貴方に黙って遊び浸っている？ 本当に勇気がそんな事をすると思っているの？」

「離しなさいよ！」

ミステリアの腕を弾く霊夢。

「霊夢、どうして貴方は勇気を信じてあげようとしていないの！ それでも貴方は……」

言いかけてうつむくミステリア。

「何よ？」

「良いわ！ 私、一人で迎えに行くから！」

そう言つて飛んで行ってしまふミステリアを霊夢は見送る事しかできなかった。

竹林の中を飛んで行くと、てゐがびよんびよんと楽しそうに跳ねているのが見えた。

「因幡てゐ！」

「あら、誰かと思えば夜雀じゃないの。何か用？」

「貴方ね！ 勇気を攫ったのは！？」

鋭利な爪を見せるミステリアに余裕な笑みを見せる。

「だったらどうするの？ 私を倒して勇気を攫うつもり？」

スペルカードを放り投げるミスティア。

「そうさせて貰うわ！ 鳥符 ミステリアスソング！」

周囲に光弾を振り撒くミスティアに対し、てゐもスペルカードを宙に投げる。

「因幡の素兎」

巨大な赤い光弾を連続で放つてゐ。

てゐはミスティアの弾幕に対し、野兎のようにぴよんぴよんと竹林を駆けながら避けていく。

「案外、ちよろい弾幕なのねえ」

「貴方の弾幕もたいした事ないわね」

空を舞うミスティアは竹林に跳ね返る赤い光弾の隙間を軽々と掻い潜る。

「あら、弾幕は避けられても私のスピードには付いて来れないのね」

竹林を飛び跳ねながら尻を叩くてゐ。

「追いつけるわよ！」

てゐに追いつこうと、スピードを上げるミスティア。

「そんな焦つてると鮫に羽をむしられるよ」

振り向きざまに大きく跳躍してミスティアより高く上がり、赤い光弾を放つてゐ。

「私より高く上がるなんて!？」

弾幕の下を潜る刹那、ミスティアの目にはニヤリと笑うてゐの顔が見えた。

ミスティアが前を向いた時には既に遅かった。竹と竹の間に張られた白い壁が目の前に迫る。

「ちゃんと下を見ないと駄目だよ」

ミステイアは強烈な衝撃を覚悟した。

ぬちゃあつ！？

だが、当たった衝撃は柔らかくねばねばした感触。

「な、なにこれは！？」

ミステイアは逆さ状態で、ネバネバする壁にめりこんでしまっていた。身体はおろか、白い物で顔は白く染まり、逆さ状態の為にスカートがめくれ、ドロワーズは丸見えだった。

「トリモチよく♪ 動けないでしょ？」

「こ、こんなの！？ ひうつ！？」

手足や身体を動かそうとすると、股間に粘つくトリモチが当たり、思わず喘いでしまう。

「今日は鳥団子鍋ね♪」

「来ないで！？」

てゐはミステイアに歩み寄ると、トリモチ塗れの胸を揉み始める。

「ひぎいっ！？ 胸は！？」

ミステイアが悶え、トロトロする液体がトリモチを伝う。

「丁度良いわね。みたらし団子が食べたいと思っていたところなのよね」

てゐがミステイアの股間をトリモチと共に捏ねる。

くちゅっ！？ くちゅっ！？

「ひょうつ!?!」

いやらしい音と共にミスティアからトロトロとした液体が流れると、てゐがそれをすくい取り、身体に付いたトリモチに塗りたくっていく。

「ほら、美味しそうになってきた」

「いやっ…………!?!」

涙目になるミスティアに構わず首をぺロりと舐め、甘噛みするてゐ。

「兎に食べられる気分はどう?」

「やめて…………!?!」

喘ぐミスティアに構わず耳に胸と性感帯を甘噛みしていく。そしてミスティアからトロロリと流れるタレを手で受け止め、身体全体に塗るのも忘れない。

「あつはつは!?! 良い気味だね。このまま西行寺の亡霊の所に送ってあげたら喜びそうね」

ミスティアの身体に塗れたトリモチがてかてかぬめる液体によって、みたらし団子のようになっていく。

「お願い…………それだけは…………」

「まあ、良いわ。これだけ低い所でもがいていれば獣か妖怪があんたを美味しく食べてくれるだろうしね」

そのまま去っていくてゐ。

「待って…………こんなみじめな姿じゃ…………」

涙を流すミスティア。その泣きそうな声は既にいなくなってしまうてゐの耳には届くはずもなかった。

「…………誰か助けて…………!?!」

泣きそうな声で叫ぶミスティア。

ここは迷いの竹林。人はもちろん妖精すら迷い、妖怪化した獣達が住まう場所。ほとんどの者が避ける場所なのだ。助けなどくるはずがないかもしれない。

——勇気を助けるはずが、自分が捕まってしまうなんて……こんな惨めな姿、勇気に見られたらどう思うだろう。

その時だった。

ガサッ!? ガサッ!?

何かが通ったのか近くの草木が揺れる。

「誰!?!」

返事はない。

もし草木を揺らしたのが妖獣の類なら厄介な事になる。同じ妖怪でも捕食されてしまう事も少なくはないし、男性なら慰み者にされる。それが人間であっても同じ事だ。トリモチで動けないミスティアを見れば、絶好のチャンスと見るだろう。

「……誰かと思えば夜雀……」

女性の声にもがくミスティア。

もがくと、粘つくトリモチが股間にまで粘ついていき、快感が伴っていく。

股間からくちゅくちゅと粘つく音が聞こえる。

「いや、来ないで!」

このままではやられてしまう。

両手を動かすと、まぶたにトリモチが張り付いて視界が真っ暗になる。

「じつとしなさいよ！ 食べられたいの！」

草木を踏んで近づいて来る足音。

視界が閉ざされて何者かは分からない。妖怪に怨みを持った者かもしれない。

「やめて……食べないで！」

「もう！」

両手を押さえられ、熱を帯びる物を当てられた。

グシャッ！？

その瞬間、何かが破裂する音と共に身体中に衝撃が走った。

炎で炙られ、焼餅のように膨らんでその身体が破裂してしまったのだ……と、ミスティアは思った。だが、まぶだに付いたトリモチが取り払われ、霊夢の顔が視界に広がる。

「えっ？」

「えっ？ じゃないわよ！ 勇気を助けに行くんでしょ？」

「だって助けないって……」

「勘違いしないでよね……ほら、あの妖怪鬼がいないと竹林が抜けられないじゃないの……そのついでよ！」
顔を背ける霊夢。それにしばらく呆然とするミスティア。

「……分かったわ。一緒に行きましょう勇気を助けに！」

ミステイアは涙を拭き、微笑した。

身体中が生暖かくドロドロとネバネバした感触。

それがぐるぐるとかき混ぜられ、マッサージするかのような感覚に身体が激しく痙攣して股間からドロドロしたモノが広がっていく。

目を開けるとやはり白の中で餅に包まれた自分。

「あううっ!？」

「やっとお目覚めね」

そう言つて杵で餅に包まれた勇気をかき混ぜる優曇華。

気を失っている間にどうやらこの作業を続けていたようだ。体液で溶けた餅がドロドロになっている。

「そろそろ本当の事を言わないと、本物の餅になつてしまうのよね」

「もう良いわてゐ! いくらこんな事しても無駄みたいだし」

「あら、もう食べてしまうのね」

隣で舌なめずりするてゐ。

「その前に……私の目を見て答えなさい」

優曇華の赤い瞳が見下ろす。

その瞳を見ていると、何だか視界がぼやけてくる。

「何を答えると……」

「これが最後よ！ 貴方の大切な人を守りたいなら答えなさい！」

指さす方向には竹林で、まな板に乗せられた餅を巨大な包丁で切ろうとしているてゐる。

それはよく見ると、霊夢の姿だった。勇氣のように餅で固められていた。餅でカチカチに固まった霊夢。勇氣の方に泣き顔を向ける。

「助けて……勇氣！」

「霊夢！ 霊夢は関係ないよ！ 何でもやるから霊夢を離して！」

「……やっぱり貴方は霊夢が好きなのね」

なぜか悲しげな表情をする優曇華。

「じゃあ、正直に喋らない子は切っちゃおうね〜♪」

「待って、てゐ……やっぱりこの子は何も知らない!？」

包丁を振り下ろすとするてゐに暴れる勇氣。粘りつく餅は糸を引くばかりで、立ち上がる事すらできない。

「なっ!? 餅が!？」

餅が体液で柔らかくなったせいか暴れた拍子に餅が飛び散って、優曇華とてゐの顔を白く染め上げる。

「……何これ……身体が熱い……」

優曇華が頬を真っ赤にし、膝を付く。

「しまった……媚薬入りの餅なんて浴びたら……私達まで幸せな餅になってしまうじゃないの!？ あっは

っは！？」

てゐも同じように膝をつき、頬を赤く染め上げる。

いつの間にか、隣に居たはずの霊夢の姿が霞のように消えていく。

「さっきまで居たはずなのに！？」

「てゐ……餅が食べたいわ……」

勇気を見下ろし、舌なめずりする優曇華。

「ぼ、ボクを食べる気！？」

「大丈夫。あんたを幸せにして食べてあげる」

てゐが勇気を持ち上げ、まな板の上に乗せる。

「基本はきな粉餅よね」

優曇華が置いてあつた紙袋を開け、粉を振りかけていく。

黄色い粉。優曇華の言うようにきな粉のようだった。それが鼻と口に入り、香ばしい風味とほのかな甘味。

咳き込む勇気に構わずてゐは転がし、きな粉を塗していく。

「うにゆううっ！？」

べっとりときな粉に塗れていく勇気。

まるで本物の餅になっていくようだった。けれど、食べられかもしれないというのに媚薬のせいかな不思議に

恐怖はなかった。

「これであんたは美味しそうなきな粉餅になったわね」

「じゃあ、首筋からただこうかしらね……いただきます」

優曇華は顔を近づけると、餅に包まれた勇氣の首筋に噛み付いた。

「……気持ちいいっ！？ 美味しく食べられちゃうよ！？」

噛み噛みする優曇華の齒の感触が心地よかった。本来なら痛みを感じるはずだが、それが首筋の部位で、餅に包まれている為に適度な甘噛みに感じるのだ。

「じゃあ、私は一番美味しい部分をただこうかしらね」

そう言って、てゐは大胆にも股間の部分を噛み付いていた。

「うにゅっ！？ そこは！？」

勢いよく股間の餅を噛むてゐ。股間の甘噛みの快感に耐えられずに放出、ドロドロした白餡が餅の中で広がっていく。

「あなたの白餡子を味あわせてちょうだい」

「白餡が漏れちゃうううっ！？」

てゐが餅を噛み千切ると、白餡が飛び散ってその頬を白く染め上げる。

「ああっ！？ てゐ、ずるい！？」

恍惚の表情で勇氣の股間の白餡を舐め取っていくてゐ。

てゐの舌の感触が快感を伴って、新たに股間に包まれた餅から白餡が漏れ出していく。

「早いもの勝ちだからね」

負けじと優曇華も餅の中の白餡を舐め取り始める。

「駄目えええっ！？ そんなに舐めたらボクの白餡子が無くなっちゃうよおっ！？」

構わず優曇華とてゐは身体中を舐め、餅をドロドロに溶かしていく。

優曇華とてゐに舐められる度に勇気の身体がびくびくと痙攣していく。

「駄目ね……これだけじゃ満足できないわ！」

「私も……」

優曇華とてゐは何を思ったのか、服を脱ぎ捨てて、蒸籠に入っていた蒸した餅を自分の身体に塗りたくり始める。

「……何を……！！？」

その身体で優曇華が勇気を抱き寄せる。

「一緒に兎餅になりましょう！」

餅の粘りと共に優曇華の豊満な胸の感触が身体に当たる。

「にゅっ！？」

優曇華がむにむにと胸を押しつける。

ねちよねちよと粘つくいやらしい音が響く。

「こうやって餅を馴染ませれば……白餡入りの兎餅の完成よ」

「そんなに動き回ったらボクの中の白餡が出ちゃうううっ！？」

優曇華が動き回る度に太股が股間に当たる……それに耐えられはらずもなく快感が絶頂に達する。

餅の中で白餡が行き渡り、ドロドロのぬるぬるにしていく。



「それ！」

べちゃっ！？

餅でべたべたになった身体で、てるが勇気の背中に抱きつく。

「あうっ！？」

「幸せの兎餅サンドの完成ね〜♪」

「そしててゐると私がこうすれば……」

くちゅっ！？ くちゅっ！？ くちゅっ！？

「美味しくなっちゃうううっ！？」

優曇華とてゐが這い回り、ぬるぬるのねばねが身体中を駆け巡る。快感がピークに達し、充滿していく白餡。

「トドメに私の中に入れてあげる……それで貴方は心も身体も完全なお餅になるのよ」

優曇華が腰を動かすと、勇気の股間にぬるぬるしたモノが当たる。

「……止めて……ボクはまだそんなの……！？」

「これで兎餅の完成よ……！！？」

何処からか、強烈な殺気。

それに優曇華が反応して、ビクリと身体を震わす。

勇気はその方向を見る。